

## (研究会の記録)

[ 脇・心霊講座より ]

### 「守護霊研究」事始め(3)

#### 霊界通信と守護霊

ここで浅野先生は、ステッドとワードの文献から守護霊との交信の一部を紹介されている。

あらゆる欧米の霊界通信中、もっとも大胆に守護霊問題を取りあつかっているのは、ステッドの「ジュリアの通信」またはワード学士の「死後の世界」などであります。まず、「ジュリアの通信」から守護霊に関する部分を抄出しましょう。

「死者の靈魂が、はじめてあの世で自分の守護霊に逢ったときのびっくり仰天たらありません。・・・私の所へ出現された守護霊には、翼がついていました。この翼はいつもあるというわけではありません。ただ翼が欲しいと思えば、翼ができるだけです。思えば何でも達せられるのが霊界の方式で、翼ができる位お易い話です。霊界が地上の俗悪な状態に優っていることを、具象的に表現するには、翼が至極都合のよい思いつきです。もちろん翼を使う必要は少しもありません。ただ私は私の守護霊が翼をつけてお現れになったことを、大変うれしく思いました。その方が私のかねての観念を裏切らないで、何よりしっかりとした感じを私に与えたからです。」

「私の守護霊は私に向かって、いかにも優しい、同時にいかにも力の籠った声で話しかけてくれました。私はその音調が骨髓までしみ亘り、そして何所やらなつかしみのあるように思いました。それはそのはずでしょう。私の眼には映らなかったものの、私の守護霊は私の地上生活中に、しばしば私の許に訪れてくださったものですもの・・・。私には、私の守護霊が何やら自分の旧い親しい方であるように思われました。守護霊から、『来れ!』と言われたときに、私は何の躊躇もなしに後について行きました。ちょうど自分の良心の命ずるところに従うような塩梅です。人間には皆守護霊がついています。守護霊は人間にはその姿が見えもせず、またその存在が判りませんが、しかし二元が善に与し、悪に離れようとするのは、皆守護霊のお蔭です。守護霊は思念の中に、わ

われわれと共に在ります。われわれはしばしば守護霊の警告を受けますが、すべて自分自身の心の衝動のごとくそれを感じ、それが自分の意識以外の衝動であることに気がつきません。」

「守護霊は言わば自分自身の他の善良な半分・・・自分という人格の一層高く、清く、そして一層発達した一部分と思えばよい。これはちょっと諒解し難いかも知れませんが、しかし事実です。なお各人には善い守護霊と同時に、悪い守護霊があり（注。本来の守護霊ではなく、その人に憑依している悪邪霊を指している）間断なくわれわれにつきまとい、時として闇の天使として、その姿が眼に見えることもあります。これは生時においてもつきまとっていると同様に、死後においてもつきまとっております。われわれはいつも、これら双方の天使の間に行きつ戻りつしております。生前われわれは、それを気まぐれとか、気分とか、欲求とかという言葉で言い表していましたが、こちらの世界に到着してみて、はじめてその出所が判りました。」

「われわれは肉体の衣を脱いで、はじめて正邪両面の直覚とか、願望とか、印象とかの本体を知ることができました。われわれは、これら善悪両用の存在物の中間におりながら、それを自分の一部分、つまり自分の属性と誤解していたのです。一緒におっても、実は全然別ものなのです。何となれば、何人も全く孤立的には生きる事ができないからです。」

「悪霊は居るには居りますが、しかしわれわれはこれを畏れる気持ちにはなれません。何となれば、われわれを助けるものは、常にわれわれを損なうものよりも偉大でありますから・・・。愛は常に憎しみよりは強力です。悪霊が跋扈するのは、ただわれわれが畏れる時、われわれが信念を失った時のみです。そんなものはわれわれが善良なる天使の命に従う時、まことの神を知る時には、全然無力です・・・。」

やや抽象的の感を与えますが、しかし実に意義深き守護霊の説明といってよいでしょう。これに比べるとワード氏のは、一層露骨な、そして現実味たっぷりの描写であります。「死後の世界」の第18章「守護の天使」の一部を抄出します。

・・・フト気がつく、叔父さんの背後には、満身ただ光明から成った偉大崇厳なる天使の姿が現れました。その身にまとえる衣裳は、ひっきりなしに色

彩が変わって、ありとあらゆる色が、それからそれへと現れる！

叔父さんに比べると、天使の姿ははるかに大きい。が、すべてが円満で、すべてが良い具合に大振り、・・・やや常人の三層倍もあるかと思われる位。そしてその目鼻立ちといったら、いかなるギリシャの彫刻よりも美しい。雄々しくてしかも気高い。気高くてしかも優雅でいる。にやけたところなどは微塵もない。親切であると同時に、凜とした顔、年寄りじみでいないと同時に、若々しくもない顔である。・・・肌は金色。人間の肌の色とはまるで比べ物にならない。頭髮も髭髯も何れもフサフサと、えも言われぬ立派さである。

余りに崇厳美麗で、とても言い表すべき言葉がない位でした。

「疑いもなく、これがいわゆる天使というものに相違ない・・・」ワード氏がそう思うと同時に、日頃の癖で翼はないものかしらと捜しましたが、そんなものは一つもついていませんでした。・・・やがてワード氏は訊ねました。・・・「私にも守護霊があるのでございましょうか？」

すると巨鐘の音に似たる力強い音声がただ、「見よ！」とひびきました。

たちまちワード氏の背後には、もう一人の光の姿がありありと現れました。大体において、それは叔父さんの守護霊の姿に似てはいました。が、しかし、目鼻立ち、その他がはっきり異なっていました。そして不思議なことには、ワード氏は何所かがかつて出会ったことがあるような、言うに言われぬ親しみを感しました。それは驚くべき変化性に富んだお顔で、同一でありながら、しかも間断なく変わる。ただの一瞬間だってそのままではいないが、そのくせ少しもその特色は失わない。ワード氏は、もしかこの姿を夢でみたのではないかしらんと試してみましたが、どうしても思い出すことができませんでした。髭髯は叔父さんの守護霊のに比べればよほど短かったが、全身からほとばしる光明、人間より遥かに大きな姿などは、すべて皆同様でした・・・。

余り長くなるからこの辺で打ち切りますが、何と力の籠った描写ではありませんか。「幽界行脚」の方にも、守護霊の描写はちょいちょいありますが、それは何とぞ原書につきてご覧を願います。

上の外にウイングフィールド女史の「他界からの指導」、モーゼスの「靈訓」、コナン・ドイル夫人の「フィネアス」、その他沢山の靈界通信をひもとけば、複雑であったり、簡略すぎたり、また詳しかったり、表面的なものであったり、その差があったにしても、皆各自の背後に、守護霊が控えていることを力説し

ているのを発見します。これがたった一つか二つの霊界からの指示であるならば、単なる主観的空想として、一蹴に付することもできそうですが、かくも軒並みに勢揃いしているのでは、そう簡単に片付けることは考えものです。いわんやそれらの通信の内容が、いかにも充実しており、これを否定すべき道理が、どこからも生まれてこないというに至りてはなおさらであります。先に挙げたとおり、各霊媒の背後には、必ず支配霊の存在する事実を鑑み、どれもこれらの霊界通信の守護霊説は、九分九厘まで正確な事実を物語っているのではないかと、私は思考するものであります。

### 私の実験の結果

浅野先生は、守護霊の研究結果をつぎのようにまとめられている。

が、それだけではまだ多少の疑惑が、私の頭脳の何所かに残っているのでありましょうが、何分にも私の最近15年間の、間断なき霊的実験は、一つひとつ守護霊存在の事実を肯定することになり、現在の私としては、もはやどうしてもこれを認めないわけに行かなくなりました。私の執行した霊的実験の顛末は、今後機会をみてボツボツ発表したい考えであります。それには多大の時日を要しますから、とりあえず今回は守護霊に関して、私が抱いている観念の要点を箇条書きにして発表し、大方の批判を仰ぐ事にしましょう。無論私は、自分の意見を皆様に押し売りする考えは毛頭ない。今後私の意見に誤謬の箇所があることに気がつけば、私は他人の忠言を待つまでもなく、自分から進んで訂正を施したい位に思っているものであります。

私の守護霊に関する意見の要点は、ざっとこうであります。・・・

各自には先天的に一人の正守護霊がついている。

上の正守護霊は一部は過去の時代の人霊、一部は自然霊（龍神など）である。

正守護霊と本人との関係は意外に密接であり、普通本人の人格、性行の6~7割は正守護霊の感化に基づく。

正守護霊が微力であったり、また本人が正守護霊の指示（普通良心の囁きの形式で来る）に背反したりすれば、両者の関係はそれだけ希薄となり、他の悪霊の乗ずるところとなる。（それがいわゆる憑依現象）

普通男子には男性の正守護霊がつき、女子には女性の正守護霊がつく。

ただ稀にその例外があるらしい。

正しい恋愛、正しい夫婦関係は、正守護霊間の恋愛であり、夫婦関係である。

正守護霊は本人の死後においても、引き続き守護を与える。

正守護霊はその人の一生を通じて変更しないが、ただ仕事の関係から、補助霊が沢山つくこともある。(欧米心靈家のいわゆる支配霊のことである)

守護霊の背後には、さらにその守護霊があり、それがどこまでもつづき、首尾連関して無限の階段があるらしい。

本人の祈願その他は、本人の自覚と否とに係らず、常にその守護霊を経て霊界に通ずる。

以上で、浅野和三郎先生の「守護霊」についての発表は完結しているのである。この一遍によって、守護霊の全貌ははっきりしてきたことと思う。

が、なお、この発表に関して、つぎのような質問が読者から投げられたので、参考のため、再掲しておくことにする。

(1) 守護霊は常に肉体内に宿るのか、あるいは体外にてその人を監督するのか。

<答> もちろん守護霊は一個の独立的存在であり、決して人間の肉体内に宿っているような事はありません。ほとんど時空を超越した境涯なので、それで十分監督保護の目的を達し得るようです。

(2) その人の守護霊はその人の存命中、他の守護霊を交代することはあるのか。

<答> 交代は致しませんが、その人の仕事が増えたり、また人格が向上したりすればいくらかでも優秀な補助霊がついてくれるようです。したがって個人としての守護霊の外に公人としての守護霊がついている人も決して少なくないようです。

(3) 人の守護霊は近親者か。

<答> 実験の結果によれば、とくに近親者とは限らない。ただし近親霊が補助的の仕事に当たってくれることは勿論です。また、守護霊は必ずしも人霊とは限らないようです。

(4) 人の病死は何者の業か。

<答>これはよほど複雑な問題で、軽々と断すべきではないでしょう。病死の原因としては(イ)肉体の欠陥、(ロ)精神上的打撃、(ハ)憑依霊の仕業、いわゆる祟り、さわりの類、(ニ)肉体的ならびに霊的遺伝、(ホ)悪病の感染等々を挙げ得ると思いますが、一人一人につきて専門家が逐一精査した上でなければ到底結論を下すことはできません。

(5) 人間と生まれるのは、その人の自由意志か、または神の使命か。

<答>この問題は、人間の出所、つまり再生と大きな関係を有し、これだけ切り離してかれこれ論議するには無用の弁でしょう。また、人間の自由意志と神の使命とは決して対立的の命題ではなく、したがって立派に両立し得ることのようです。もう一段深く考えを練ってください。解答はそれからの事にしましょう。

(6) 人々がある神に祈願した結果、その願望がかなったとすれば、その時その人の守護霊はいかなる働きをしたか。

<答>守護霊はその人の背後にあり、祈願が達成するように仲介の労を取るようです。祈願の成就、不成就は守護霊の力が大いに与るものと考えてよいでしょう。